

あいよく

穢翼のユースティア

*Quasi dicitur Passatilis, Affertioni dicitur Dei, Prox ovisus, ignis, carnisque et spiritus
Tu sapientiam manare, Divites Paterna dicitur, Tu raris, Quoniam
Sermonis dicitur gustura, Accendo Isamen sensibus, Licet dicitur
In forma nostri corporis Virtute forma, et pernet.*

オーガストオフィシャルハンドブック

2011年夏号

includes
オーガスト最新作情報

 **AUGUST**

P R E F A C E — ま え が き

こんにちは、オーガストです。

初めての方、はじめまして。

何度目かの皆様、いつもご愛顧頂きありがとうございます。

さて本年4月28日に発売した新作『緋翼のユースティア』ですが、アンケート葉書が今でも毎日開発室に届いております。

今回は熱い思いが込められたご意見ご感想を沢山いただきました。

開発スタッフが直接葉書を拝見し、それがまた次の作品への糧となりますので、まだお送り頂いていない方がいらっしゃいましたら是非よろしくお願ひ致します。

また、本冊子では新作開発のご案内を掲載することができました。

こちらも今後ご期待頂ければ幸いです。

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、オフィシャルハンドブックをお楽しみ下さい。

2011年夏 オーガスト/ARIA 拝

CONTENTS

- 3 …… 『緋翼のユースティア』Short Story
マイ・リトル・ロード
- 8 …… オーガスト最新作開発のご案内
- 10 …… スタッフ対談
- 11 …… あとがき



マイ・リトル・ロード

榊原 拓

俺が王城に住み始めてから、しばらく経った。

一年前の自分には、まさか自分が今こんなことになっ
ているとは想像もできなかっただろう。

王城に住むようになっただけではなく、王女のリシ
アと……。

いつか、俺は汗だらけで夢から覚めるんじゃないか
と思うことすらある。

「ほらカイル、行くぞ」

「またか」

だが、最近俺は王城から頻繁に連れ出されていた。
当のリシア女王にである。

いや、もう戴冠しているのだからリシア女王か。

「国民の父たる私の崇高な仕事に文句があるのか」

「ヴァリアスの前でも同じことを言えるか」

「う……それは……」

リシアが戴冠してから、一時は混乱していた政治も
落ち着いてきた。

もちろんルキウスの手腕によるところも大きいし、

ヴァリアスをはじめとする近衛騎士団が静かに力強
くリシア支持を打ち出していたのも寄与しただろう。
だが何より大きいのは、リシア自身の成長だ。

政変を経て、無知で無邪気な幼い女王は、立派な女
王へと変貌を遂げていた。

……はずだったのだが。

「だが自分の目で見ないと庶民の暮らしは分からん
と言ったのはお前ではないか」

「確かに言ったが……もう何度も見ただろう」

「ちらっと見ただけで分かったつもりになるな、と
言ったのもお前だ」

「国政の方は放っておいていいのか」

「午前中に政務を終わらせたのは、お前も見ていた
だろう」

「そう頻繁にいなくなつて、誰かに迷惑はかけてい
ないのかつてことだ」

「何かあったらすぐに戻れるよう、召使いに伝書鳩
を渡してある」

「……まったく、ああ言えばこう言う」

「何か言ったか？」

「いいえ、国王陛下」

ルキウスやヴァリアスや学者などから国の現状につ
いての講義を受けることと、重要な会議には出席し
て決裁を下すこと。

これさえしっかりやっていたら、リシアの自由な時
間はかなり増えている。

個々の政治課題については、有能な貴族が。そして
貴族の取り纏めはルキウスが滞りなく行っている。

国が上手く回っているということだ。



そして俺は、リシアが新設した国王直属の内偵機関に所属している。

リシアは、政治が公正に行われているか、有能な人材が配置されているか、腐敗がないか、目を光らせる立場になった。

そのために設立された内偵機関。

俺を傍に置くためにリシアがごり押しで設立したようであり、その実、国の中で果たす役割は大きい。

そこで俺は失敗した。

「ルキウスが毅然と統率していても、現場の役人が腐ってたら、民衆は改革など実感できない」

「綱紀粛正の通達は何度も出している」

「そんなもんで役人が真面目になるなら民衆は苦勞しないな。お偉いさんの発想だ」

こんな話から、実際に見ないと分からない、じゃあ見に行く、護衛も無しでか？ カイムが来てくればいい、という流れになり……

今に至る。

「国民の父たる王は、国民の生活を真に知らねばな
意気軒昂なりシア。」

変装して、王城の裏口から馬車で抜け出す。

御者の親父とも、もう相当顔見知りだ。

「またですかい。カイム様も大変ですわね」

「様、はやめてくれ。……大変なのは確かだが」

小さな悪事をあばき、処罰した下級役人の数はもう数えていない。

時には下層の屋根の上から降りられなくなった仔猫を助けたり、ネズミを駆除したり……。

基本的に、困っている民衆がいてリシアが首を突っ込んだら、俺が何とかすることになっている。

手柄は全てフィオネになすりつけ、俺たちは颯爽と姿を消す。

……だが、リシアも変装してはいるものの、見るものが見れば一発で女王だと分かるだろう。

むしろ最近では、知って知らないふりをされている感すらある。

慕われていると言えは聞こえはいいが……

まあそれでも、喜んでくれている民衆がいるのも確かではある。

だから俺は、積極的にこの御忍びを止めはしてないかった。



「このドブが溢れて困っているそうさ。不衛生なことこの上ない。役人は何をやっておるのだ」

リシアはプンスカしているものの、実際にドブをさるうのは俺の仕事だ。

何か、おかしい気もする。

——ドブを奇麗にすれば、困っていた民衆は確かに助かる。

だが、さすがに国王が管轄するような仕事じゃないだろう。これは。

「カイム……お前、何をやっているんだ」

汗をぬぐう俺に、呆れ顔で声をかけてきたフィオネ。今では、上層以外のノーヴァス・アイテル全域の治安を司る部隊の隊長だ。

「フィオネの手柄を増やしてやろうと思ってるな」

「またか……。お前も城で何かのお役目に就いたのではなかったのか？」

「これがそのお役目だ」

ちらつとリシアに目をやる。

「……………」

心なしか、フィオネの目が同情の色を帯びたような。

「政務に影響は出ているのか？」

「影響が出るようなら俺が止めるんだが」

リシアは優秀で、政務はてきまきこなすし、この頃はルキウスやヴァリアスを質問責めにしてたじろが

せることもあるくらいだ。

「なら仕方ないな。自分で選んだ道だろう。頑張れ
としか言えない」

「おお、フィオネではないか」

去ろうとしたフィオネを、リシアが引き止める。

「これは陛下。ご機嫌麗しう」

「今はその呼び方はなした」

「失礼致しました」

「そうだリシア。フィオネなら下層や牢獄にも詳しいし、腕も立つし、最近では地位が上がってあまり現場も見えないだろうし、お供にいいんじゃないか？」

「こらカイム」

「フィオネはリシアのお供は嫌なのか」

「そういうわけではないが……」

「なら問題ない」

「いや、そもそも陛下の一番近くに居るカイムこそ
がだな」

「……お前たちは仲がよいのか？」

俺たちの会話を聞いていたリシアが、低い声で言う。

「そつ、そんなことはございません陛下」

「喧嘩友達、みたいなもんだ」

「む、それなら良いが……」
口を尖らせる。

焼き餅を焼く国王陛下も可愛いものだ。

「ところで、やはりフィオネは忙しいのだろうか？」

「えっ」

「世直しのための供がもう一人いれば……と思っておったのだが」

「わっ、私にお命じ下されば、いつでも馳せ参じます」

「本当か？ 迷惑ではないか？」

「微塵もそのようなことはございません。光栄でございます！」

「ルキウスにも、ヴァリアスにも、誰にも言わないでくれるか？」

「もちろんですっ」

……こうして哀れな俺に同僚ができた。

「金貨に混ぜ物をして铸直し、質の悪い貨幣を増やすなど言語道断っ！ 懲らしめてやれっ」

「はっ」

「へいへい」

仮面舞踏会でつけるようなマスクをしたフィオネと並んで剣を振るう。

その変装でいいのか……

だが、フィオネが予想外にノリノリなのは助かる。複数人数を相手にするとき、俺はリシアの護衛に専念できるからだ。

……今日は九枚の金貨と一枚の銀貨を溶かし合わせ、十枚の金貨を作っていた工房へ。

鍛冶屋が副業として始めたところ、予想外に小遣い稼ぎになったらしい。

「全て片付けました」

「うむ。見事な働きだ。ご苦労」

「恐悅至極に存じます」

とフィオネは言うものの、ほとんど抵抗もしない工房のおっさん二人を縛り上げただけだ。

俺がしたことと言えは聞き込みくらいのもの。

「なあ、俺そろそろ要らないんじゃないか？」

「私が敵と立ち回っている間、リシア様がお一人なのは不安だ」

「そうぞカイク。守ってはくれないのか？」

「はあ……」

それはそれとして、偽貨幣の铸造は大罪だ。

細かい法は覚えていないが、確か死罪かそれに近い罪だったような……

不蝕金鎖の先代も禁じていたシノギだ。

「どうする？ リシ……じゃなくてボス」

後ろ手に縛られた工房のおっさん二人は、涙目になつてがくがく震えている。

「私共の組織で捕らえたら、死罪になるかと」

「そ、そうか……」

フィオネの指摘を受けて、二人のおっさんは泣きながら頭を床に打ち付け、謝り始めた。

どう見ても、魔が差しただけだ。

俺がここをつきとめるまでの間にも、どこかの組織が後ろについているような話は少しも聞かなかった。「どうしたら良いと思う？」

困ったリシアが俺に助けを求めてくる。

「自分で始めたことだ、自分で決めろ。それが上に」



立つ者が背負う責任というものだろう」

「うー……」

リシアは悩んで室内をぐるぐる歩き回る。

「これまでに偽造した分を弁済させて、製造施設を没収する、というのはどうだ」

「それだけか？」

「恐れながら、あまりに軽すぎるかと」

「だが……」

また部屋をうろろろするリシア。

こういうところで悩んでおくのはいい経験になるだろう。

「では、下界に……追放か？」

リシアがこちらを窺いながら言う。

鍛冶屋の二人の顔からザーツという音とともに血が引き、床に崩れ落ちる。

下界追放は、このノーヴァス・アイテルで最も厳しい刑罰だ。

「見せしめにはなるかも知れんが」

「この者達には少々厳しいかも知れませんが、法に照らせば過ぎた罰ではありません」

「法には幅がある。お前の裁量で決めていい」

「……難しいものだな」

「人が人を裁くというのはそういうことだ」

「心して決める」

俺とフィオネはこっそり視線を交わし、君主の成長ぶりを見守ることにした。

……しばらくしてリシアが決めたのは、弁済・施設の没収に加えて、長期の強制労働というものだった。

それも本物の製造所だ。

「なるほどな。こいつらが作った貨幣の出来を見る

限り、本物と遜色ない。いい仕事するんじゃないか」
「鑄造を担当している貴族へは、私から連絡しておきます」

「よろしく頼む」

フィオネがいると話が早いのも助かる。

早速フィオネは呼びつけた部下に二人を連行させた。部下がフィオネの変装を見て目を丸くしていたのは黙っておこう。

そして、俺たちも鍛冶屋を出る。

——尖った気配。

路地に出た俺たちの前に、音も立てずに三つの人影が立ちほだかった。

いつの間だ。

……こいつら、これまでのやりとりを覗いていながら、気配を絶っていたのか。

それも、俺やフィオネも気づかないレベルで。

身のこなしも只者ではない。

「フィオネ」

「ああ」

俺とフィオネは、いつでも戦いに臨めるよう剣の柄に手を掛け、腰を少し落とした。

俺たちが急に警戒を強めたのを見て、リシアが訝る。

「……どうした？」

「かなりの手練れだ」

「決して私達の後ろからお出になりませんよう」

「わ、わかった」

二人の声色から、リシアもただ事ではないと気づいてくれた。

この相手に比べたら、これまでに伸してきたチンピ

ラや悪徳役人などの戦いはお遊びのようなものだ。
王城暮らして久しく味わうことのない緊張感。
背中から首筋にかけて、震えが駆け上った。

武者震い。

三つの影は、細身、大柄、中肉中背。

揃いの布地を巻いて顔が見えないようにしている。

「お前から……何者だ」

「……」

返事はない。

すつと足音をさせずに三人が動き、俺たちを囲み退路を絶つ。

プロの足運びだ。

前執政公ギルバルト派の貴族の残党だろうか。

俺とフィオネですら、この場を乗り切れるかどうか微妙なところだ。

まずい。

ここでリシアに何かあったら。

せつかく落ち着いた政治が、国が……台無しになってしまう。

横のフィオネを見ると、既に覚悟を決めたという顔をしていた。

俺が躊躇っている場合じゃない、か。

すう——と息を一つ吐き、呼吸を整える。

筋肉の力みを抜く。

成功する自分を頭に思い浮かべる。

……身体が覚えている、昔の、暗殺者だった頃の記憶。

泥沼の中を這いずり回っていた俺が、今や女王の隣まで駆け上っていた。

その女王リシアは成長して、いい政治をやり、国も

良くなっていきそうだ。
俺には上々な人生じゃないか。

ここでリシアを守るなら、俺が生まれてきた意味ってやつも……

「お戯れも程々にして
頂きたいっ！」

三人のうち大柄な男が発した大音声。

リシアが反射的にびくつと震える。

俺も、十分に聞き覚えのある声だった。

「フィオネ殿も、何をしておられるっ！」

「ひっ」

身をすくめるフィオネ。

その男はつかつかと歩み寄ってきて……リシアを叱りつけた。

「このようなことをして、御身に大事があったらどうされるおつもりか！」

「す……すまぬ……」

縮こまる女王。

「ヴァリアス殿、続きは王城へ戻ってからにされてはいかがか」

「人が来て、話題になつては不都合かと存じます」

後の二人は、ルキウスとシステイナか。

『面目次第ありません……』

俺とフィオネは、声を揃えて頭を下げるしかなかった。

「そもそも王たる者がこのような軽率な行動を取るなど……」

ヴァリアスはまだ叱り足りない様子だったが、フィオネの変装に吹き出す直前といった風情のルキウス

とシステイナが何とか取りなしてくれ、城へ戻ることができた。



俺とフィオネは散々ヴァリアスに叱られたものの、

公に処分できる内容でもなかったことから、近衛騎士団の早朝鍛錬への出席を半年義務づけられるだけで済んだ。

鈍った身体を鍛え直せそうだ。

一方リシアは、受けねばならない学者の講義が倍になった。

加えて顔なじみの御者の親父との関係も白状させられ、王城の外に出る道を失った。

だが……

「なあカイク、今度はワインの樽に入るといいう手を考えたのどう思う？」

城下で暮らす国民の父として、子供の暮らしを知らないよりは知っている方がいいに決まっている。

俺はそう自分を納得させて——いや俺自身も楽しんでたのかも知れないが——また彼女と街へ出ようと思っていた。

END



開発進行中!!



です。

オーガスト最新作 鋭意

大都会を発った直通電車が速度を落とす。
光と緑と潮風とに彩られた平野に、一つの都市があった。
その中心となるのは、私立汐美学園。
学力優秀な者だけでなく、分野を問わず一芸に秀でた者までもが集う学園だ。
輝く星のごとき才能は、数えること約5万。
自由と希望を身に纏い、今日も学生たちは闊歩する。

広大な学域にそびえる、図書館叡智の城の最奥。
静寂に支配されるべき閲覧室からは、しかし、弾んだ声があふれ出る。
部屋を占拠するのは6人の学生たち。
先日まで、縁もゆかりもなかった彼らが、何故この場に集っているのか——
その密やかな理由は、まだ誰も知らない。
笑顔の中心で本のページを繰る、彼でさえも。

シナリオ・榊原拓 他 / 原画・べっかんこう
発売時期・未定

from STAFF

こんにちは、オーガストです。「機翼のコースティア」に続くオーガスト完全最新作の開発が、(私たちにしては)早くも開始されました。今回は、ご覧の通り「学園」が舞台となる予定です。学園を舞台とした作品は過去にも数作ありましたが、そのいずれとも異なる設定と物語の方向性ということで、また新しい楽しみを創造できればと考えております。当小冊子では本当にさわり、まだまだ開発途中のご報告となりますが、コミケ明けのなるべく早いうちに、正式な新作発表という形でまたお目見えできればと思います。どうぞお楽しみに、お待ち頂ければ幸いです。



べっかんこう (以下 べ) : 今回も対談の時間がやってきました。

榊原拓 (以下 榊) 榊: さて、多くの方が予想していなかったであろう新作の発表です。

べ: 既にご覧になっていただいていると思いますが、キャラデザインの方は着々と進んでいます。

榊: シナリオの方も進んではいるんですが、ストーリー・キャラ・世界観はそれぞれスパイラルしながら同時に作り上げていくものなので、結構行きつ戻りつするんですよね。だから確定情報として出せるものはまだ少ないんですが、内部的に8割分固まってる資料はもっとあります。

べ: この時期は、面白そうなアイデアが出ると、それを生かすためにキャラや世界観を変えることがまだ許されるので、ぎりぎりまで粘っていきたいですね。動き出すともう変えられないので今が一番頭の使いどころ。

榊: 放っておくといつまでもこねくり回しちゃうんで、締め切りまでギリギリ頑張ります。

べ: キャラデザもこれから微調整が入るかもしれないので次回お見せするときにはちょっと変わってるかも?

榊: 確かにデザインも初期案と最終案では違ったりしますよね。

べ: 毎度、これで良いのかという葛藤との戦いなのです。今回も皆さんの反応が気になって仕方ないですねー。どきどき。

榊: 確かにゲームを作っていて、第一報を出す瞬間が二番目に緊張します。一番は発売直後ですけど。

べ: 今回は学園ものなんですが、制服デザインはいつも苦労します。

榊: シナリオチームは、学園ものを連続して作っているとどうしても考え方が凝り固まってくるというか袋小路に入ってしまう感じになるんですが、『機翼のユースティア』で思いっきり学園じゃない世界を舞台に物語を展開したので、また新鮮な気分で作れそうです。あとユースティアは様々な実験的要素を盛り込んでいたので、いろんな意味で作って初めて判ることってのも多かったんです。この経験も次の新作に生かしていければなど。

べ: 新たな学園については、今後どんどん新しい情報を出していくので楽しみにしていただければ。……そういえば毎日届くユースティアのアンケート葉書、全部読んでます。

榊: 今回は初めて登録される方の比率も高いですよ。

べ: それは嬉しいですね。

榊: あとは、「葉書の狭いスペースには感想を書ききれないので、別紙で」という方も今回かなりいらっちゃって。

べ: ブログやツイッターに感想を書いてくださっている方もいますよね。素の意見に触られます。

榊: 楽しめたというご感想も嬉しいご意見も、しっかり受け止めて次に生かしていきたいですね。

べ: ですね。乞うご期待です。

スワップ対談 第29回 べっかんこう & 榊原拓



2011.7.18 18:15 社内にて

POSTSCRIPT - あとがき

オフィシャルハンドブックをお読み頂き、ありがとうございました。
お楽しみ頂けましたでしょうか。

春の小冊子で「なるべく早く皆様にお知らせできるよう制作を進めて参ります」と書いた新作の企画について、第一報をお届けすることができました。まだまだ生まれたての企画ですが、これから作り込んでいく中で皆様によりご期待頂けるような作品になればと思っています。今後、開発が進んでいくにつれて情報も公開して参りますので、どうぞよろしくお願い致します。

なお以前より開発中とお知らせしていた『FORTUNE ARTERIAL』のPS3版ですが、諸事情により開発を中止することとなりました。続報をお待ち頂いていた皆様には大変申し訳ございませんが、何卒ご容赦下さいますようお願い申し上げます。その分も新作の開発に力を入れていければと考えています。

それでは、今回はこの辺で。
今後ともオーガスト/ARIAをよろしくお願い致します。

2011年夏 オーガスト/ARIAスタッフ一同

オーガストオフィシャルハンドブック 2011年夏号

※禁無断転載・無断複製

最新情報満載!

オフィシャルホームページにぜひお越し下さい!

<http://august-soft.com/>

<http://aria-soft.com/>



あいろく
穢翼のユースティア

Art Book Page 111 | All rights reserved. No part of this book may be reproduced without the permission of August Software. All rights reserved. August Software is not responsible for any damage or loss of data caused by the use of this book.



オーガストオフィシャルハンドブック
2011年夏号



